ばる。

◇史跡踏査　十月四日勝尾寺、箕面瀧安寺方面。
藤島教授指導、北西助手、研究科細川、學生八名參加。

宗教學會

◇十月九日十日兩日
同志社大學に行われた日本宗教學會に、坂本助教授、横山講師、英、千田（研究科）、草野（大學院）の諸氏が出席。
第三部會に於て坂本助教授は「宗教的體驗とは何か」と題して、宗教經驗の概念規定に關するユニークな解明を提示された。

國史學會

◇史蹟踏査研究旅行　七月九日—十三日
三品教授引率、參加者、山田助手以下學生十五名、高野山・南紀州方面
龍田神社（王寺）から高野山へ、高野山大學五來先生の御案内で山内を隅々まで見學、天德院に宿泊、第二日は五時起床、南紀へ向う途中、粉河寺・根來寺・紀三井寺・長保寺と歩み和歌浦で休憩、夜行列車は熊野那智神社へと、第三日は熊野地方ですごし、こゝで解散す。

◇史蹟踏査　十月四日
山田助手引率、學生十三名參加
大津西北部方面
關寺蹟（長安寺）から圓城寺・圓滿院を經て、法明院にフェノロサ墓を訪れ、琵琶湖を右にしつゝ大津京趾（近江神宮）に歩みを運ぶ。

國文學會

◇例會　五月十七日(日)十時　於研究室
蕉風の一問題　山本唯一
彦根菖蒲について　藤谷一海

◇例會　六月十四日(日)十時　於研究室
世俗諺文の國語學的研究　水田紀久
教行信證製作年時考　潟岡孝昭
なお、午後、桂離宮拜觀。

◇見學
第一回　五月十四日(木)鞍馬貴船方面
新入生歓迎會もかねた史蹟見學で、好天にめぐまれ、まことに有意義な一日であつた。
第二回　五月廿六日(火)
大阪三越にひらかれた芭蕉展を見學。

翁覃溪本宋拓化度寺碑について

中田勇次郎

本學秀庵文庫に宋拓化度寺碑が一帖所藏されてゐる。これはもと清朝の乾隆嘉慶年間、金石碑帖の學に精しかつた翁方綱字正三、號覃溪、蘇齋が所藏してゐたもので、世に翁覃溪本、蘇齋本など稱せられてゐる。この碑は、古來、唐の歐陽詢の楷書の中の第一品と稱せられてゐるもので、書の上では最上位に置かれてゐるものである。且つ、この本は帖内に清朝諸家の題跋が無數にあつて、この碑の研究資料としても極めて豐富な内容があり、その中でも特に翁方綱の題跋が最も多く、これによつて彼の碑帖の學問が詳しく窺はれる所にこの本の大きな價値がある。この本はまた、碑の鑑賞が如何に行はれるかといふことを知るに就ての一典型を示すものであつて、その點からもこの本の價値を認めることができる。そこで、この碑の概要を紹介すると共に、翁方綱の碑帖の學問とこの碑の鑑賞法について卑見を述べ、この本が如何に貴重なものであるかを説明したいと思ふ。

先づこの本の體裁について述べよう。この本は竪三八・九糎、横一八・五糎の摺册で、古裂にて裝裝され、外題に「化度寺邕禪師塔銘、范氏書樓原石拓本、端方題」とある。この裝裝は翁方綱所藏當時のものではなく、帖尾に光緒三十年の端方の跋があるから、恐らくこの時に改裝され、同時に外籤が題されたのであらう。端方、字は陶齋、號午橋、滿洲正白旗人、金石學に精しく、收藏甚だ多く、陶齋吉金錄、陶齋藏石記等の著述がある。

全帖三十八葉あり、帖首に副葉五葉があり、拓本は六葉半、拓本の後にまた副葉二十六葉半がある。第一葉に李瑞清の内籤があり、「化度寺故僧邕禪師塔銘、李更從猛龍司馬敬訓上追景君但以右軍之腴變其貞耳篋中有虛白篋爲題此籤、梅庵」と題してある。册尾に李瑞清の光緒三十一年乙巳の跋があるから、この題籤もこの時の作で

「翁方綱印」白文方印、「翁方綱」「正三」朱文方印、「蘇齋金石文」白文方印、「寶蘇室」白文方印、「文淵閣校理翁方綱藏」朱文方印、「寶蘇室」白文方印等みなそれである。何れも一つ一つ異つた印で、中には深い由緒のあるものもある。彼はこの碑を一度賞玩するごとに一跋を記し、一印を捺して樂しんだのであらう。「長毋相忘」印は乾隆四十三年戊戌、陳崇本字は伯恭が張燕昌字は芑堂、浙江海昌の人に漢瓦を摹して鐫刻させたのを翁方綱に贈つたものである（復初齋詩集卷十七）。「及見落水蘭亭」印は乾隆四十六年五月、趙子固落水本蘭亭敍を借りた時に作つて捺したのであらう。「石墨書樓」印は乾隆四十五年五月、友人の桂馥字は未谷、山東曲阜の人が方綱がこの本を入手したので、わざ〳〵之を刻して贈つたものである（第十二葉翁跋）。この他「葉志詵」朱白兩文方印は葉志詵字は東卿、湖北漢陽の人、翁方綱の門人、翁の復初齋詩集を刻した人、「蘄水陳氏曾望」朱文長方印は陳曾望清末の人のもの、又「消蔭堂鑒賞章」朱文方印、「樂福堂生」白文長方印、「長公摹古」白文方印等がある。「衡酒仙讀碑記」朱文方印は本帖に題識を記した完顏衡永の印記ではないかと思ふ。

第六葉に次いで最も印記の多いのは、拓本の末尾に當る第十二葉である。こゝにも翁方綱の印記が最も多い。「得□廟堂碑唐石本臨摹考證二旬之久」朱文方印と「得□廟堂碑唐石本臨摹考證三旬之久」白文方印の二印は、嘉慶十二年丁卯四月、廟堂碑唐本を鉤摹してゐた頃、廟堂碑とこの本を對看した時に作つて捺されたものであらう。又「掄才桑梓」、「詩境」、「蘇米齋」、「晉觀堂」等みな翁の印記である。この他「江恂之印」白文方印は江恂字は于九、號蕉畦、江蘇儀徵の人、乾隆年間の人、翁方綱の門人江德量の父に當るのもの、「葉名澧」朱白兩文方印は葉名澧字は潤臣、志詵の子のもの、「衡酒仙家珍藏」朱文長方印、「酒仙所藏金石」白文方印、「酒仙心賞」朱文方印は多分先述の完顏衡永のものであらう。この他、各葉に猶多數の印記があり、一々述べ盡すことはできない。

次にこの碑の傳來について述べよう。翁方綱の說によると、帖內にもと元の趙子昂の「天水郡圖書」印があつたが、裱裝する時に誤つて剪り棄てられた。この印は趙のものとして誤がないから、この本は趙が所藏してゐたのであるといふことである。明代になつて、萬曆三十四年丙午春、章藻字は仲玉、長洲の人が墨池堂選帖を刻し、その卷三に化度寺碑を收めてゐる。その祖本になつたのがこの本である。すなはち墨池堂帖本は翁本の摹刻である。然し、その當時この本を誰が所藏してゐたかはよく解らない。章藻は文徵明の門人で、父の簡と共に模勒刻板の技術に優れ、文氏停雲館法帖の刻に與つたので有名である。又、王世貞の門に遊んだと言はれるから、彼は文王二氏所藏の化後寺碑を觀てゐるはずであるが、それを祖本に採用しないで、却つてこの本を採用したのは、この本が二氏所藏の諸本より優れてゐたからであらうといふ。

清朝になると、雍正元年癸卯、この本は蔣宗元に歸した。宗元、字は亦厚、號小山・愚亭・金粟居士、康熙二十二年癸亥生、雍正十二年甲寅、浙江浦江知縣となり浦翁と號した。父は廣、字は坤維、祖父は寅、字は亮天、弟は調元、字は若梅、家はもと素封家で宋拓雲麾將軍碑を所藏してゐたといふ（翁跋小傳參照）。宗元はこの本を入手するや、恰も吾子の如く之を愛玩し、旅中にも必ず之を行篋に携へて行くほどであつた。彼は自ら之を愛玩するのみならず、又彼と最も親しく、彼がこの本を購ふ時の紹介者であつた潘寧に、機會あるごとにしば〳〵題跋を請うてゐる。潘寧、字は仲寧、號陋夫、又號退翁、山陰の人、揚州の朱與白の家に僑寓し、金石を酷嗜し、を善くし、兼ねて摹印を善くしたといふ。

蔣潘二氏の題跋の往來は、雍正元年に始まり乾隆五年に了つてゐる。その間、潘は蔣のために雍正元年から十一年までに十三の跋を題し、蔣がそれを趙子昂の蘭亭十三跋に擬してゐるのも奧ゆかしい。因に、化度寺碑にも陳彥廉所藏本に元人十三跋があり、これが後に翁方綱に歸するのであるが、これと形式は異なるが、十三跋といふのはこの碑にとつて緣故の深い數である。

二氏は互に題跋をしたゝめつゝ、よく味はひ、よく樂しみ、遂には私生活にまでも融合しつゝ、こゝろゆくまでこの帖を賞玩した。その例を一、二あげよう。

雍正七年三月十三日の蔣跋に

己酉三月十三日、早微雨、相對瓶中海棠一枝、冷艷動人、展玩是帖、時荆妻攢眉、告米竭將斷午炊、予欣然不顧也

春の日、海棠の花をながめながらこの帖を展玩してゐると、妻君が今日はお米が一粒もありませんからお書御飯は拔きですよと言つたが、予は欣然として顧みなかつたといふ跋。潘寧がまたこれに取材して後に詩を題する。又、雍正六年戊申九月十二日、宗元が西安から旅裝

十二月十六日　潘寧第十跋、次韻和小山子冬夜見懷效韋體之作八行　22
雍正九年辛亥長至前三日　潘寧第十一跋「昔見廣平本字比此卷略少」十五行　24
除夜　蔣宗元跋、再到西安省家大人除夜三鼓次前韻二首八行　19
雍正十年壬子二月九日　蔣宗元跋、青門寓中用舊韻題化度兼懷潘退翁四行　22
九月十五日　潘寧第十二跋「小山子每出化度相賞余必紀其歲月」四十一行　6
雍正十一年癸丑四月廿四日　潘寧第十三跋「癸丑夏小山鵠選修門」六行　25
除日　京師にて蔣宗元跋、用丁未除日韻二首八行　19
雍正十二年甲寅十月廿四日　蔣宗元が京師より浦邑に赴任する途中邢上にて潘寧第十四跋「雍正甲寅蔣君由闕下持牒而來」六行、時年七十四歲　25
雍正十三年乙卯元且　蔣宗元跋、次後村韻二首並題識五行　25
乾隆元年丙辰人日　蔣宗元跋、用帖中舊韻漫興書于官署挺秀樓下七行　26
小除日　蔣宗元跋、五絕二首八行　26
乾隆五年庚申五月廿日　揚州演法庵にて江炳炎跋、二行　13
閏六月十五日　潘寧第十五跋、題詩四首十一行時年八十歲　26

乾隆四十四年己亥、翁方綱が鄉試の試驗官として江南へ赴いた時、汪中に面會し、揚州に於て二種の化度寺碑が賣りに出てゐるのを聞く。その一つが先述の朱與白所藏本で、も一つは、馬曰璐字は佩兮、號半槎、江都の人の所藏本である。汪はこの二本を入手するが、馬半槎本は朱筠字は竹君、號笥河、順天大興の人に歸し、後に徐星伯に歸する。朱與白所藏本は、翁方綱が門人江德量字は成嘉、號秋史、江蘇儀徵の人を介して入手する。時に乾隆四十五年庚子二月十六日のことである。同年秋、朱與白の親戚に當る羅兩峯がこの本に跋をする。その跋に「この帖しば〳〵里中に觀る。庚子春、小蓬萊閣に歸す」とあるから、この記事に誤がないとすれば、乾隆四十五年春、一時黃易の小蓬萊閣に歸してゐたらしい。

彼はこの本を入手するや、十二年前、蘇東坡の天際烏雲帖墨迹を入手した時にも增して、讃歎欣賞、寢食具に忘れるに至り、これが宋の范雍の賜書樓原石であるとし、その書齋を石墨書樓と名づけ、爾來終生坐右に愛玩し、その間、この本を臨摹し考證し鑑賞し、年每月每、精密な題跋を逐次記入し、嘉慶二十二年五月九日、卽ち彼の卒する前年夏の跋を最後としてゐる。かくて記入した題跋の數は、大小長短凡そ百五十則に及んでゐる。この本を入手した四十八歲から、卒する前年八十五歲に到る四十八年間、終始この碑の題跋考證に捧げたのである。

乾隆六十年乙卯、彼は邱東河鐵香、眞定太守の篋中に元人十三跋のあるのを發見する。これは陳彥廉本の題跋で、郁逢慶書畫記に揭載されてゐるものである。翁の門人馮敏昌字は伯求、號魚山、廣東欽州の人宋葆醇字は師初、號芝山、山西安邑の人が奔走に勤めて、この題跋を翁の爲めに入手し、翁はこの元人十三跋一帖（十三跋の後にもと明人二跋があつたが翁の入手した時にはもうこの二跋はなかつた）を、所藏本の後帖として愛藏する。從つて翁本は前後二帖あるはずであるが、後帖は其後分離され、何人に歸したかその所在はよく解らない。

翁方綱の歿後、その所藏の精拓及び手藁は均しく門人の孫烺に歸したと言はれる。この本も孫氏に歸してゐたかも知れない。門人葉志詵が、道光二十九年己酉十月、鮑氏本に題した跋に「家藏の蘇齋本尙都中に存す」と言つてゐるから、道光末年には葉志詵が所藏してゐたことが解る。現に帖內に志詵の印記もある。又、志詵の子名澧の印記もあるので、志詵の後は名澧に傳はつたのであらうと思はれる。光緒三十三年丁未史謙跋に、秣陵葉氏寄廬に於てこの本を觀賞してゐるが、この葉氏が誰であるか未だよく解らない。葉名澧は咸豐九年に卒してゐるから、もちろん名澧のことではない。この本は光緒三十年頃に改裝され、端方以下七家の題跋が之に加へられるが、その後誰に歸したかよく解らない。帖內に「衡酒仙讀碑記」、「衡酒仙家珍藏」、「酒仙所藏金石」等の印記があるが、前述の如く、若しこれが完顏衡永の印記であるとすれば、この本は民國十七年の頃、完顏衡永が所藏してゐたことになるが、この間の事情は未だよく解らない。この本が吾國に將來された前後の消息に就ても、未だ詳しく聞いてゐない。昭和某年、禿庵大谷瑩誠先生に歸し、先生は小化度庵と號された。同二十三年四月二十八日先生御逝去になり、その後數月にして、その御遺愛の古硯、古印、封泥、藏書等と共に大谷大學圖書館に寄贈され、禿庵文庫に保存されることゝなつた。

次に翁方綱の題跋に就て述べよう。この本の翁跋の內容は極めて豐富であつて、凡そ化度に關する古來のあらゆる文獻、この本と同賞して書品の優劣を論じた化度の諸本及び其の他の金石碑帖のこと、化度の拓本の沿革、系統、書法等に關すること、彼がこの本に題した詩篇の數々、この本にまつはる因緣話、逸事、佳話、彼と交遊した文人學者の動靜、傳記等、あらゆる方面に亙つて精細入念に記入されてゐる。彼の詩文集である復初齋文

集、集外詩、集外文、詩集等と相補益する史料も少くなく、この本から汲み取ることのできるものはなか〳〵多い。そこで翁跋に併せて、彼の他の著述をも參考して、彼のこの碑に於ける考證と鑑賞法を究明し、この本が如何に貴重なものであるかを紹介したい。

先づ彼は當時に在つて觀られる限りの化度の拓本を探索し、その拓本の主要なものを選んで、大體之を三つの系統に分つた。第一には翁氏所藏本、玉泓館本、王弇州第一本、同第二本、鮑氏本以上の五本を同石とし、范氏書樓唐原石とした。第二には王孟揚本、陳彥廉本、呉門繆氏本、以上の三本を同石とし、宋初翻本とした。第三には墨池堂帖本、横石本、直石本、薛衡本等の後世の摹刻本を一類とした。この三つの系統は彼によつて始めて明らかにされたもので、この碑の拓本の研究の基礎になる。但し、今日では新しく燉煌本が發見されたので、彼の第一の系統の諸本は實は宋翻本であり、第二の系統の諸本が唐原石本であることが明らかになつた。從つてこの點では彼の說は訂正されなければならない。第一の系統の諸本は、恐らく范氏書樓原石の摹刻であつて、その刻石が南渡の際兵火に逢つて破壞された殘石の拓本であらうと私は考へてゐる。南渡の際多くの碑石が破壞されたことは、宋の陳槱の負暄野錄にも記す所であつて、この碑も恐らくこの災禍に逢つたのであらう。

この碑は唐原石が早く亡んだために、原碑の形式がよく解らなかつた。そこで原碑の形式を傳世の剪本から復元する必要があつた。彼は乾隆五十年乙巳仲秋、始めて所藏本を摹勒入石し、次いで友人に屬して三段斷石之圖を寫させ、自ら范氏書樓圖歌を作つて之に題する。同五十五年、新しく小樓を卜し、又この圖を樓に掛ける。嘉慶四年己未、王孟揚本を借觀して始めてこの碑の文字の位置を驗し、先の三段斷石之圖を重定しこゝで始めて正しい復元圖の作成を完了する。この圖によつて唐石が三段に斷裂してゐたといふ宋以來の傳說が實證されることとなつた。原碑の行次が三十四行行三十三字であることも、も早動かぬ事實となつた。尙「宋拓化度寺碑來去原委各札」所載の「化度寺碑全圖」及び、門人李彥章の抄寫した翁方綱著化度寺碑考に「全碑三十四行圖式」、「宋拓翻本圖式」、「北宋洛陽范氏賜書樓壁石圖式」の三圖式があつて、彼が各系統の諸本に就て作成した圖式に就て知ることができる。

彼の題跋を通じて最も大きい問題となつてゐるのは化度寺碑の書品の品第に在る。この品第を下すに當つては、彼は化度を他の諸本と對校し、又化度以外の碑帖と對看しつゝ、前後四十數年間、絶大な精力と博學な考證を以て、その書品の優劣を徹頭徹尾論じてゐる。その結果、化度は歐陽詢の書の第一品であるばかりでなく、古今楷法第一神品とまで推稱するのである。この結論を得るに到るまでの經緯の大體は、僅かな紙數では到底述べ盡すことはできない。こゝにその要を取つて解說しよう。

この品第に當つて、化度の規準となつた拓本は、第一の系統の五本、その中でも特に翁覃溪所藏本であつた。彼の見解では、第一系統の諸本は第二系統の諸本より書品が高いとした。それに就ては、兩系統の諸本を一々臨摹校勘して、その碑字の書法を、一點一劃きはめて精密に比較研究してゐる。その成果は翁本の拓字の旁注「翁覃溪先生手摹化度寺碑底本」大谷大學圖書館藏、翁方綱著「化度寺碑考」所收「化度寺碑銘筆法攷」松本文庫藏に詳しい。何故第一系統が第二系統より書品が高いかといふ理由は、第一系統の方が唐の楷書として晉の書法の神髓をより多く得てゐる點にあつたと思はれる。これについては後說を參照されたい。

經、行書の蘭亭敍、唐の楷書としては虞世南、歐陽詢、褚遂良三家のものを主としてゐる。今、左に彼の題跋を二、三揭げよう。

予は宋拓黃庭を臨して、自らその後に跋し、黃庭を推して晉唐楷書の正脈とした。因つて唐人の書で正しい血脈を受けついでゐる品々を列記するに當り、先づ第一に廟堂碑、孔祭酒をあげ、次に化度、九成、郎官をあげた。といふのは虞世南は王右軍の正統の法脈を承け嗣いでゐるからである。しかし、廟堂の陝本の拓の善いものを取つて諦玩してみて、廟堂は未だ化度が黃庭の神髓を得てゐるのには及ばないことを知つた。因つて再び化度を展玩して、その規矩方圓の極であることを歎稱し、晉唐正書の室に入る者は斷じて化度を推して古今楷法第一神品であるとした。乾隆四十八年一月跋

唐代には已に王右軍の正楷はない。黃庭樂毅はすべて元祐祕閣の摹刻であるが、樂毅の梁摹は特に淸古である。若し貞觀の時に稷帖を搨勒した意に準ずるとすれば、右軍の正楷はこれを唐代に求める時は、たゞ化度銘のみである。嘉慶九年十月二十日跋

先に黃庭を以て化度の源を探つたが、黃庭は久しくそ

を爲すといふ點から言ふと、梁摹樂毅論は重撫を經てはゐるが、尙、時々斯の神理を具備してゐる。正楷制格の一邊に偏しないものは、それたゞ化度のみか。嘉慶九年十一月一日跋

乙丑冬、始めて樂毅論梁摹本を手に入れ、化度が前述のやうである所以を知つた。この事は今になつてやつと悟徹したのである。昨年春に記したのは、未だ徹底してゐなかつた。嘉慶十年十二月十日跋

蘭亭に關するものとしては、

予今年春、率更化度寺碑原石殘本を得、始めて化度は筆々蘭亭から出で、醴泉銘もさうであることを悟つた。化度は蘭亭の神髓を得、醴泉はその氣韻を得てゐる。これは率更が蘭亭を臨してから後、精思してこれ書いたからこそ、はるかに歐書の他碑の上に出てゐるのに相違ない。今日、元人陳直齋所藏の定武蘭亭を見ることができ、益々前言の謬らぬことを信じた。乾隆四十五年七月二日跋

日々定武蘭亭を臨して、始めて化度寺碑の妙を悟る。乾隆四十五年七月二十五日跋

是月又、齊原司農の齋に於て、趙子固落水蘭亭を借り得、臨翫すること兩月の久しきに亘り、響搨卷子を成る。是に於て晉唐の秀氣俱にわが几研の間に在り。乾隆四十六年五月十二日晨起書

適々定武五字損本を手搨するに因つて、これが蘭亭の息壤であることを知る。竟に何ぞ晉に永欣僧房（辨才の寺）の物のみであらうか。嘉慶十年九月二十日跋

唐人の楷書としては虞世南の孔子廟堂碑唐本、歐陽詢の宋拓醴泉銘、宋拓虞恭公碑、小楷千文、褚遂良の度人經、張旭の郎官石記其他多くの碑帖を化度と對看した題記がある。今、その中から二、三の例を揭げよう。

廟堂碑は再刻三刻を經てゐる。黃庭經、郎官記は幷に眞本がない。たゞこの碑（化度）と九成宮醴泉銘は楷法の圭臬であつて、この書は實に九成の上にある。石が又久しく亡んでゐるのであるから、この眞石殘本（翁本）は天下古今法帖楷書第一として疑ひのない者である。乾隆四十五年三月十八日跋

乙巳春、王虛舟の所謂平生見第一本の虞恭公宋搨のものを見ることができた。借臨すること十日、この帖（翁本）を廻視し、益々化度の淳古淡泊、圭稜を化盡し、超然として比較にならないことを感歎した。乾隆五十年四月十日跋

今年春、越州石氏所刻、褚河南度人經小楷を入手した。

これも率更の楷法と參證することができる。そして、江秋史の宋拓醴泉銘も予の書齊に留められて、日々几上に置いて之を賞玩してゐる。然し、上下古今、萬法は源に歸し、必ず化度に折衷されるのだ。乾隆五十六年春跋

予は化度寺碑を入手して後十二年、始めて醴泉銘宋拓本を入手した。乾隆五十七年三月十八日跋

虞恭全拓存字千に近い本を入手した。毎に行間雲籠淡月の處に於て墨彩を覩る。而して又、新しく入手した樂毅論を以て、用筆の祕を仰親し、化度の神光を時々互照させるのである。嘉慶十一年四月二十日跋

廟堂碑唐本を以て同几對看する。嘉慶十二年二月二十三日跋

今、廟堂唐本を詳審し、益々化度の優れてゐることを歎稱する。化度が唐楷第一であることは疑ひない。例は盡きず、多種多樣である。彼は一度化度を他の碑帖と對看する毎に、必ず化度をその上位に置き、化度の書品を一段階づゝ高めてゆき、かうして次ぎ次ぎにあらゆる金石碑帖と對看してゆき、一種の歸納的な探求法を用ひ、遂に化度を最高無上の品に崇めるに至るのである。

彼の說によると、本來、書法は篆法が正統である。篆が變じて隸となり、隸が變じて楷となる。楷は晉に始まる。南北六朝の際、楷法は蕩然として地を拂つたが、唐に至つて節制して整齊した。その源は晉に出てゐる。（唐楷晉法表序）ところが、晉楷にして眞本の傳はるものは一つもない。從つて晉法の神髓は唐楷の眞石の碑に求むべきである。そこで唐楷を論じ、唐楷は晉法を仰承するものを以て圭臬とすべきであるとし、化度、廟堂、醴泉三碑を最上品とし、この三碑は何れも右軍の嫡乳であり、晉法の今に存するものであるとした。（蘇齋唐碑選）

唐楷の三家、虞世南、歐陽詢、褚遂良の中、虞は王右軍の正傳の血脉を承け嗣ぎ、唐の王右軍と稱すべき人で、右軍の古逸淡泊の風神を得てゐる點では誰も及ぶ者はないが、彼はたゞ晉法を守るだけで、之を善く變じなかつた。これに反し、歐陽は晉法を守ると共に、而も之を善く變じ、獨立獨出した唐楷の本色を發揮した。歐は虞に優るといふのではないが、歐は虞の渾融と褚の潤澤とを合して一にした如きものであるとした。かくて、歐書を唐楷第一として推稱する。（歐虞緒論、化度寺碑考）

歐書の中では、化度と醴泉が最上品であり、而も之は

七月廿六日　七言絕句一首、又一首
八月十二日「羅子兩峯爲余言」・二行　19
十二月十日「前跋者喬固翁字介夫寶應人」・四行　13
十二月十四日「臨虛舟此迹之明日」・二十一行　19
乾隆四十六年辛丑　15
四月「辛丑四月始得見虛舟跋本」・一行　21
閏五月七日「辛丑四月借竹君所得馬半槎本」・二行　27
五月十二日「是月又於齊原司農齋借得趙子固落水蘭亭」　5
七月廿六日「將一字豈潛」・二行　5
十月「辛丑十月果得見虛舟姚恭公碑」・二行　16
乾隆四十七年壬寅　15
二月「壬寅臘月朝雪後石墨書樓南窓展玩」・二行　16
乾隆四十八年癸卯　5
正月十一日「予臨黃庭經一過」・五行　14
乾隆四十九年甲辰　5
二月十九日「甲辰春始用山谷弇州月峯定遠諸先生之言」・四行　6
三月十日「寶應喬介夫字固庵」・二行　13
三月廿日「辛丑二月吳門陳謹庭說」・六行　4
四月八日「甲辰春張遷碑之潘跋」・一行　28
五月十八日「仲宣法芝米芾元祐辛未孟夏觀山樵書」・二行、並題識四行　15
十月廿日「予所收雷溪題籤之初翻本」・四行　16
冬「癸卯秋冬之間」・二行　15
十二月「甲辰臘月始詳考虛舟所跋者實是翻本也」・二行　22
除夕「馬半槎本乃宋時翻者非眞本也」・三行　5

乾隆五十年乙巳　19
三月十五日「昨又以紙接痕辨馬半槎所藏一本非眞也」・二行　5
四月十日「乙巳得見王虛舟所謂平生見第一本之虞恭公宋搨者」・二行　21
乾隆五十一年丙午　29
一月廿七日「黃長睿謂」・三行　29
六月十一日「試新安程伯厚所造五石油三萬杵項煙墨題記」・二行　28
七月廿一日「小松札來云」・十四行　28
冬「乾隆丙午冬仲抵任南昌展玩題記」・四行　14
乾隆五十二年丁未　28
一月廿二日「乾隆丁未正月廿二日南昌使院友善堂觀雙鶴飲啄題此」・二行　14
一月廿三日「七言絕句一首並題識」・五行　16
四月十一日「唐人墨蹟世或傳有褚書顏書以予所見皆僞託耳」・四行　16
乾隆五十三年戊申　29
六月十一日「偶見眞賞齋所藏夏承碑」・十一行　29
六月十五日「此帖尾題紙有天水郡圖書印」・六行　12
乾隆五十四年己酉　29
二月廿二日「王元美弇州山人續藁跋」・八行　3
四月五日「泰和舟中支篷看山展帖吟玩」・四行　29
乾隆五十五年庚戌　20
至日「己酉臘用以小歸初理舊篋」・四行　20
十二月十六日「乾隆庚戌秋得吳門陳謹庭書」・三行　22
十二月廿二日「去年十二月商邱陳伯恭學士得初翻九百三十字之本」・二行　21
乾隆五十六年辛亥　29
春「今年春得越州石氏所刻褚河南度人經小楷」・二行　29

五月廿三日「己酉秋從何君夢華借摹休寧汪氏之本更小楷千文」・三行　29
長至前三日「乾隆辛亥歲長至日前三日曲阜試院後軒展玩」・一行　24
八月二日「米公不說」題識並七言絕句二首・二十六行、蠅頭細楷　15
十二月十二日「此帖與漢武梁祠象旁拓本並著名邗上」・三行　24
乾隆五十七年壬子　22
二月九日「乾隆壬子二月九日范縣道中於驛舍篝燈題」・三行　24
三月十八日「予得化度寺碑古本後十二年始得醴泉銘宋拓本」・六行　14
七月廿日「壬子六月謹庭自吳門雙鈎所藏弇州第二本來」・八行　29
乾隆五十八年癸丑　11
四月三日「化度醴泉皆有界格」・六行　25
四月廿四日「鉅野道中驛舍展臨」・一行　19
十二月卅一日「乾隆癸丑除日展玩此帖」・三行　25
乾隆五十九年甲寅　25
十月廿四日「寶蘇室南窓展玩」・一行　25
乾隆六十年乙卯　25
三月一日「郁氏所記唐拓本」・十八行　25
三月三日「此偈松屏贊」・一行　13
嘉慶元年丙辰　22
七月十日「金壽門有畫蘭竹寄江二炳炎詩」・二行　13
嘉慶四年己未　22
七月十六日「弇州所藏此二本今予皆摹於篋矣」・一行　21

八月十四日「郁氏所記本」・二行　5
嘉慶五年庚申　33
四月十日「解春雨跋是碑云」・九十一行　34
月「是碑金石錄及寶刻類編皆云」・八行　30
某月「得此帖二十年」・一行　5
嘉慶六年辛酉　20
一月四日「予得此帖濕題以吳興稧帖十三跋爲北」・三十八行　34
四月十九日「予既攷定是碑行次作圖矣」・四行　34
四月十九日「去年借得蔣春臯所收繆氏本」・二行　34
五月十五日「辛酉春宋芝山借得徽州鮑君所藏宋拓本計九葉」・三行　14
七月廿日「七百年前紙墨五百年前裝潢二百年前描誤」・一行　12
嘉慶七年壬戌　12
三月四日「此年月裝尾之誤固已然」・四行　8
三月十四日「今年展玩舊本淡拓焦山鶴銘」・二行　34
四月七日「予得此帖前竟無副葉」・一行　11
四月「予嘗以范氏書樓在洛陽」・十六行　11
五月五日「綿邈以下銘詞也」・二行　8
六月十二日「孫月峯化度碑跋云」・二行　24
十月廿二日「予藏此古刻而無古跋」並七言絕句四首・十行　34
嘉慶八年癸亥　24
三月十五日「馬衍齋所藏武梁祠像拓本」・十二行　13
五月三日「吳門繆氏所收化度孟法師碑皆懸值千金」・十四行　21

八月七日　七言絕句二首並題記・二十四行　20
嘉慶九年甲子
十月七日　「吾齋中年來」・三行　7
十月廿日　「唐世已無右軍正楷」・三行　35
十月廿日　「偶借陸叔平畫洞庭小幀」・二行　5
十一月一日　「囊背以黃庭探化度之原」・十二行　11
嘉慶十年乙丑　「元常力命表始悟右軍書付官奴之祕」・八行　11
六月廿日
九月廿日　「適因手搨定武五字損本」・三行　24
十月十六日　「孫退谷謂」・一行　9
十二月十日　「乙丑冬始得樂毅論梁摹本」・一行　8
嘉慶十一年丙寅　「丙寅春得虞恭全拓存字近千之本」・十六行　8
四月廿日
五月四日　「率更書最推化度者」・三十一行　21
嘉慶十二年丁卯　「以廟堂碑唐本同几對看」・八行　10
二月廿三日
四月廿五日　「是歲四月鈎摹廟堂碑之足資攷證者百廿字」・九行又六行　12
五月十日　「虞恭公碑已得二千餘字矣」・四行　11
十月　「今已訪問」・三行　21
十二月十五日　「今以玉泓館本校之」・一行　4
除夕前一日　「嘉慶丁卯十二月以荷屋所得玉泓館本細對二旬之久」・二行　9
嘉慶十三年戊辰　「鮑君藏本戊辰春復借來」・二行　34
春
四月二十日　「今攷此貞」・九行　14
閏五月十日　「又借玉泓館本覆對」・一行　12
五月廿二日　「嘉慶戊辰春復借鮑本與與荷屋所得玉泓館本同几細對八十餘日」・十四行　35
五月廿四日　「鮑本後幅有九」・三行　35
嘉慶十六年辛未　「癸卯正月」・一行　5
六月廿六日
嘉慶十七年壬申　「始得精摹建初銅尺」・一行　24
八月
九月三日　「壬申八月復借鮑本來」・一行　35
嘉慶二十二年丁丑　「處々提筆乃得天然清古柴几創栿之祕」・一行・時年八十五歲　35
五月九日

無年記

「王秋澗玉堂嘉話云」・五行　35
「明人金石評考云」・六行　4
「貢清容集一條」・三行　4
「王敬美奉常集跋」・二行　4
「米南宮云」・六行　4
「楊東里集跋化度寺碑云」・六行　4
「弇山人巵言云」・四行　5
「山谷題化度寺碑云」・三行　5
「楊无咎補之嘗自題所藏邕禪師塔銘石云」・三行　5
「又山谷題跋一條」・二行　5
「山谷題跋云」・一行　5
「晁无咎題化度寺碑云」・一行　5
「讀李端叔姑溪題跋」・三行　5
「李姑溪跋云」・十九行　6
「唐釋玄應一切經音義云」・五行　7
「顧亭林金石文字記」・二行　10

「風神即於深厚得之」・二行　12
「凡爲半幅者十有三存字四百六十」・七行　12
「何義門云」・二行　15
「長洲宋閣學大業號荊洲康熙二十四年庶吉士」・二行　15
「開諸同年蔣春農舍人云」・七行　15
「大雪中有持盧舟墨迹」・四行　15
「蔣錫震宜興人」・二行　16
「湘鎮所臨三百六十種」・三行　17
「宜興曹在豐字滿斯今跋不知何以割去」・橫書一行　18
「昨與與丁小疋與客持宋拓澄清堂帖來觀」・四行　27